

■柳井市観光振興ビジョン進捗管理会議 議事録（要旨）

日 時：令和8年3月25日（水）午後2時00分から午後4時30分まで

会 場：柳井市役所304会議室

出席委員：國本善平、木阪泰之、松重伸子、蔵本典子（職名、敬称略）

事務局（商工観光課）：課長 水村康弘、課長補佐 石川義之、課長補佐 石岡裕子、
主幹 三浦正明、職員 吉岡希緒

傍聴者 0人

議事資料 柳井市観光振興ビジョン

柳井市観光振興行動計画（後期）

概要

事務局から、ビジョン策定後から現在までの10年間における実施施策の自己評価について説明を行った。それに対する意見の概要は、次のとおり。

●目標値の達成状況について

- ・アンケート調査の結果は、来訪者満足度指数は2025年度目標の66.7%に対して、実績値は56.8%で未達成となった。
- ・本ビジョン策定時の33.6%に比べれば向上したが、調査回答者は96人、そのうち実際の来訪者は31人であり、本ビジョン策定時の回答者786人に比べてサンプル数が少なく、有意な調査結果となったかは疑問が残る。
- ・市民・事業者満足度指数は2025年度目標50%に対して、実績値は24.6%で未達成となった。
- ・本ビジョンの主旨が柳井市を挙げて観光に取り組むことであったことを考えれば、関係事業者等の回答結果は厳しい数字であるといわざるをえない。
- ・参考指標ではあるが、観光客入込数が本ビジョン策定時の約46万2千人に対して、2025年度は約33万4千人と減少となっていることは憂慮すべき事態と考える。
- ・本ビジョンのパッケージごとではなく、主要な構成要素を性質別に分けて、「本ビジョンの求める内容や水準が実現できたのかどうか」を尺度にして評価を行う。

●パッケージごとの評価について

（1）百話百景創作プラン

- ・百話百景を誘客資源にするのは困難であり、観光施策として百話の創作に固執することは避けた方がよいと、この会議で当初から指摘していた。
- ・ストーリーを作って、そこに訪問者が集まってくるのかということは疑問であった。
- ・このパッケージの実現に人的エネルギーを取られたことで他のパッケージの事業実施に影響が出たと思われる。
- ・各地区で創作が行われている動きや逸話の掘り起こしには意味があり継続すべきである。
- ・推進マネジメント組織の体制づくりは今後も何らかの形で取り組んでいくべきである。

(2) 「担い手確保」抜本改革プラン

- ・柳井金魚ちょうちんが各地で広まっていることは実感できている。
- ・柳井金魚ちょうちんに幼少時から触れることは貴重な機会であるため継続する。
- ・観光地教育や行政の資質の向上はビジョンに掲げなくとも本来やるべきことである。
- ・施策展開や組織作りの役割分担はビジョンの初期段階で行うべきであった。
- ・観光協会の統合と法人化は早期にメリット・デメリットの整理を行って検討すべきであった。
- ・柳井市観光協会としては法人化に向けての勉強会を行ってきたが、法人化はいったん立ち止まってもいいのではないかと。事務局体制等を含め身の丈にあった対応を考えた方がよい。
- ・高校再編が行われ当面は市内の学生が多い状況があるので、観光協会内に地域の部活動のような部会も検討する。
- ・柳井市観光推進機構の設立は、観光協会の統合法人化の検討が長引くのであれば、その間、市が中心を担い関係者が集まって代替的に進めるべきだった。

(3) 「観光力結集施設」設営プラン

- ・「白壁の町並み」、「麗都路通り」、「柳井川」のエリア化はビジョンのほとんどの期間において、展開方法に具体策がなく進展を見なかった。重要伝統的建造物群保存地区でこれほど駅に近い所は他になく、今後も柳井駅を含むエリア化の実現に向けて取り組むことが必要である。
- ・みどりが丘図書館の建設によって、ビジョンが予定していなかったゾーンからの回遊が生まれ、観光客誘致にも効果があった。魅力的な施設であり、話題性があるうちに追加施策を講じるべきである。
- ・シークレットミュージアムは素晴らしかったというコメントがSNSで発信されていた。市が首都圏や関西圏でPRした成果として東京や京都からの来訪や問い合わせが増えている。
- ・大島地区には魅力的な食事処が多くあり、柳井市街とのニーズの補完が期待できるため、一連の動線になるようにサポートし合いたい。

(4) 「新たな人の流れ」創出プラン

- ・4つのステージ連携会議は今年度もまだ行われていない。ビジョンが求めるレベルに達しておらず、一層の情報交換や対策が必要である。
- ・「観光力」発揮のための施策連携の推進は、行政各部署の施策を市の観光力を高める意識をもって取り組む趣旨だが、市の自己評価からはその成果がはっきりとしない。
- ・お試し住宅での体験者が景色を気に入って来た人もいる。釣りや農業体験のニーズもあり、これらを繋げていくことも必要である。
- ・人、店舗、子どもを増やすことは重要な課題であり引き続き取り組む必要がある。

(5) 必須の観光インフレパッケージ整備戦略

- ・「観光風土」の不断の醸成、「観光資源」の意欲的獲得と整備、「おもてなし」の常態化と進化、

「情報マネジメント・プロモーション力」の資質向上と差別化といった行動計画はビジョンに盛り込んで実施するものではなく、本来は観光行政としてベーシックに必須で取り組むべきことである。

- ・スポーツ観光は誘客や交流人口の増加に有効であり、コンセプトを明確にし、取組内容を整理・充実させてアピールすべきである。バドミントンやバスケットボール、卓球、野球などの歴史や著名な選手などの掘り起こしや物語化、顕在化にも取り組むべきで、それこそがストーリー観光にも繋がっていくものと思われる。
- ・観光の視点では、県外から見れば、柳井広域は一つのエリアとして認識されている。1市4町が一体の観光ゾーンとして、サポートし合える体制を整え、共同施策を講じる必要がある。

●全体

- ・本ビジョンは非常に高い理想を掲げ、観光振興を一つの地域運動として展開しようとするものであったが、理想主義に過ぎた面があった。内容としては事業構想であり、そのままでは行政の実務仕事に載るものではないため、ビジョンの指示内容の実現可能性を行政手法に則って判断し、行政プランを作成して、年次計画に従って予算を充てるべきであった。
- ・そのような趣旨で、本会議の初回の会合で「行政計画に落とし込んで実施してください」との指摘を行い、市役所内の関係部署が集まって対応を協議調整する場と観光振興行動計画の作成を求めたが、具体的な方法や初手の役割分担、実施年次等の内容等が不十分なものとなっており、執行部が十分に内容を咀嚼できないまま上滑り状態のスタートになった。
- ・この10年間、商工観光課のビジョンの担当者は1名であった。本ビジョンの全体業務量を考えるとこの人員体制に無理があったのではないか。
- ・市の自己評価は本ビジョンの今後の施策を整理する棚卸し的な内容になっているため、主要な構成要素を性質別に分けて、「本ビジョンの求める内容や水準が実現できたのかどうか」を尺度にして評価を行うべきである。そのため本会議としての評価をあらためて整理する。
- ・ストーリー観光を目指した百話百景の創作は、4話しか集まらず誘客もできていない。
- ・ストーリー観光の着想そのものが空論であったのみならず、百話百景の収集、創作を商工観光課が直営で行ったためマンパワーが削がれ、ビジョン全体の推進にマイナスの影響があり、初動期にしかできない推進体制の構築に手が着かなかった。
- ・ストーリー観光をリーディングプロジェクトに位置付けたことも大きな問題といえる。百話百景の創作は、コンテンツの磨き上げではなく発掘から取り掛かろうとするものである。当然、発掘には多くのエネルギーが必要であるし、仮に百話集まったとしても、小粒な集合体に過ぎず、遠方から訪ねてみようと思う動機付けにはなりにくい。
- ・そのため、本会議としては初回の会議で百話百景は観光とはいったん切り離し、郷土の再発見の取組として進めることを促した。
- ・担い手の確保では、観光協会の統合法人化は熱意のある検討を感じることはできなかった。そのため柳井市観光推進機構は陽の目を見なかった。
- ・観光力結集施設の設定では、JR柳井駅から白壁通りまでをエリア化して、店舗の新たな誘致による街歩きの回遊を目指したものだが、その点では成果は見られなかった。

- ・大島瀬戸の拠点化について、大島観光センターを令和7年にリニューアルする方針が示されたことは大きな前進である。
- ・漁師町公園は今後もイベント・情報などのソフト事業を中心とするなら、「公園」の表現は再考した方がよい。
- ・新たな人の流れ創出の面では、既存施設のネットワークは十分な成果を上げたとはいえないものの、みどりが丘図書館の整備によってこの施設を起点とする今後の波及が期待される。
- ・観光に関わる仕事と定住は、時間を要する取組ではあるが、移住の前提となる空き家・空き店舗の情報を観光関係者が共有して定住や開店のサポートをする仕組みが必要である。
- ・観光インフラの整備の面では、推進体制やプロジェクト、特定エリアの振興では苦戦したが、観光行政として行うべき施策については従来の仕事の延長線上にも在り進展を見た。
- ・広域連携の展開は、地域人口が縮小する中で1市4町が行政境界を越えて観光交流人口・関係人口を呼び込むための協働事業が必要であり、柳井市がその取組の中心を担うべきである。
- ・大島地区の誘客のターゲットはこれまで以上に周防大島町への来訪者を意識し、同町との連携を模索すべきである。
- ・新たな取組であるスポーツ観光については、柳井市が築いてきた市民史にも立脚し、独自性もあり、目的を絞った誘客滞在交流施策として、団体リピーターも期待でき、経済効果も含めて有望と考えられる。
- ・本ビジョンの前半期に会議で前年に指摘した事項が進まず、翌年も翌々年も同じ指摘をすることが多くあった。関係部署の管理職からはビジョン実施への意欲が伝わって来ず、概して組織的なマネジメントが不全であったとの印象がぬぐえない。
- ・ビジョンの中期はコロナ禍と重なり、人の動きが止まったこの時期は、ビジョンの実行状況をいったん評価するタイミングであった。今回のような施策の継続についての仕分けを行い、ビジョンの枠組みを現実寄りに改編することも可能であった。それを本会議として提案できなかったことは反省点として残る。
- ・ビジョンの後期の後半になって、基礎的な取組で実績が積み上がり、特定エリアの振興についてもみどりが丘図書館とバタフライアリーナの整備、シークレットミュージアムの実施によって今後への期待が持てる状況になっている。スポーツ観光という意欲的な新規プロジェクトも見えてきた。
- ・本ビジョンの求めが過大だったとしても、市役所や関係団体にはこれまでの行ってきた方法や担い手、対処する時間感覚があり、徐々にではあるができるところから取組を進めてきた。十分ではないにしても可能な範囲で地道に成果は上げてきたともいえる。
- ・柳井市への観光入込数は大きく下がっている。提唱された精神である「柳井市を挙げて取り組む必要がある」という基本は忘れてはならない。